

(26) ねぎ
(ア) 病害

病害虫名及び 防除時期	防除方法及び注意事項
苗立枯病 (リゾクトニア)	薬剤防除 1. 土壌灌注
根腐萎凋病 7月上旬～9 月上旬	<p>発生条件</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 連作で発病が助長される。 2. 大豆粕、魚粕などのC/N比の低い有機物の施用は発病を助長する。 3. 土壌塩類濃度（EC）が高いほど多発する。 <p>耕種的防除</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 健全な苗を用いる。 2. 土壌EC値の低下に努める。 <p>物理的防除</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 還元消毒 <ol style="list-style-type: none"> (1) フスマ又は米糠を1t/10a混和した後、土壌中の水分がほ場容水量以上になるようかん水する。 (2) 処理後ただちに（一両日中）透明フィルムで密着被覆し、ハウスを密閉して20日間保つ。 (3) 有機物の混和むらがあると効果が劣るので注意する。 (4) 地温（消毒が必要な深さ）が30℃以上になることが必要なので、処理時期に注意する（目安としては、処理期間中の平均気温20℃以上かつ日照時間3時間/日以上）。 (5) 土壌が強い還元状態になることが必要で、その目安は強いドブ臭が発生することである。 (6) 還元消毒処理後は土壌診断を実施して施肥対応する。また、消毒後に可給態等の窒素が5～13kg/10a程度供給されるので、堆肥などの有機物は施用しない。
小菌核腐敗病 (露地ねぎ、春まき・夏秋どり作型)	<p>発生条件</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 20℃以下の冷涼・湿潤条件下で、土寄せなどによって被覆された葉鞘部から発病する。 <p>耕種的防除</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 連作を避ける。 2. 完全な反転耕を行う。 3. ほ場の排水性の改善に努める。 4. 抵抗性に品種間差があるので、常発地では品種の選定に考慮する（平成12年普及奨励並びに指導参考事項259ページ参照）。

病害虫名及び 防除時期	防除方法及び注意事項
	薬剤防除 1. 茎葉散布（土寄せ前）
黒腐菌核病 （簡易軟白ね ぎ）	発生条件 1. 発生は地温に依存し、15℃以下で激しく発生する。一方、18℃以上では発生が抑制される。 耕種的防除 1. 4月定植までの低温期には地温を上昇させる効果のあるグリーンマルチ等を利用する。 2. 雑草の多いほ場ではグリーンマルチの利用は避ける。 薬剤防除 1. ペンチオピラド(20%)水和剤フロアブルの 1000 倍液 1 L/m ² を定植直後～15日後までに1回、又は定植直後及び約30日後の2回、株元に灌注する。後者は、より高い効果が期待できる。 2. 地温上昇マルチと薬剤の株元灌注を実施しても効果が不十分な場合、ダゾメット粉粒剤の60kg/10a処理を併用する。
べと病 6月上旬～	薬剤防除 1. 茎葉散布 （1）マンゼブ水和剤を初発前から散布する。 ****道央地帯における防除効率化技術の一例**** 主要病害（べと病、さび病、黒斑病）に対しては、収穫時期が8月までの作型では無農薬又は収穫30日前を重点防除期間としたローテーション散布、収穫時期が9月以降の作型ではマンゼブ水和剤の予防散布を基本とした8月中旬（べと病初発前）からのローテーション散布により、減農薬栽培が可能である（平成16年普及奨励並びに指導参考事項120ページ参照）。
黒斑病 8月上旬～	薬剤防除 1. 茎葉散布 黒斑病のみを対象とした防除を行う必要はなく、べと病とさび病との効率的な防除で対応できる。
黄斑病 6月下旬～8 月中旬	薬剤防除 1. 茎葉散布
さび病 8月上旬～	薬剤防除 1. 茎葉散布 発生初期（まん延前）から薬剤を散布する。

病害虫名及び 防除時期	防除方法及び注意事項
葉 枯 病 6月中旬～10 月中旬	薬剤防除 1. 茎葉散布 (1) 本病は、べと病の発生後に発生するため、シメコナゾール・マンゼブ水和剤を用いてべと病と葉枯病の防除を同時に開始する。なお、本剤の散布開始時期は各地域のべと病発生時期を考慮して決定する。 (2) 8月どり作型では、シメコナゾール・マンゼブ水和剤を2週間間隔で3回散布する。 (3) 9月どり作型では、(2)に加えて収穫3週間前と2週間前にTPN水和剤フロアブルを2回、収穫1週間前にアズキシストロビン水和剤フロアブルを1回散布する。 (4) 10月どり作型では、(2)に加えて、収穫3週間前と2週間前にアズキシストロビン水和剤フロアブルを2回散布することで、葉枯病及びさび病に対して高い防除効果を示すが、耐性菌の発生を防ぐためアズキシストロビン水和剤フロアブルの散布は収穫3週間前又は2週間前の1回とする。 (5) 道南地域におけるシメコナゾール・マンゼブ水和剤の散布開始時期は、8月どり作型では6月中旬、9月どり作型では7月上旬、10月どり作型では8月中旬である。 耕種的防除 1. 適期に収穫する。 2. 窒素の多施用を避ける。 3. 土壌 pH が低いほ場では、酸度調製資材を投入し土壌 pH を適正化する。 4. 品種間で発病の差異があるため、発病の多い作型では発病の少ない品種を選択する（平成 21 年普及奨励並びに指導参考事項 59 ページ参照）。
リゾクトニア 葉鞘腐敗病	薬剤防除 1. 茎葉散布

(イ) 害虫

病害虫名及び 防除時期	防除方法及び注意事項
タマネギバエ 定植後～生育 中	薬剤防除 1. 株元灌注

病害虫名及び 防除時期	防除方法及び注意事項
ネギアザミウマ 定植時 培土直前 7月中旬～9 月中旬	<p>収穫 30 日前までは寄生頭数が 10 頭/上位 3 葉以下であれば収量に影響しない。商品化率 90% に対応する被害許容水準は、収穫前 30 日間の寄生頭数で 2 頭/上位 3 葉である。</p> <p>薬剤防除</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 薬剤抵抗性情報（詳細は 261~277 ページ参照） ピレスロイド系薬剤抵抗性個体群：全道で広く確認されている。 2. 植溝土壌混和 3. 作条施用 4. 株元施用 5. 茎葉散布 <p>多照・少雨の時は発生が多いので注意し、十分に散布する。</p> <p>****ピレスロイド剤抵抗性個体群出現に伴う薬剤防除体系****</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 収穫 30 日前から効果の高い薬剤（スピネトラム水和剤フロアブル、トルフェンピラド乳剤、フロメトキン水和剤フロアブル）を 7 日間隔で散布する。 2. 散布間隔が 10 日程度に開くと防除効果が劣る場合があるため、降雨などで予定日に散布できない危険性がある場合は、前回散布 5 日後程度に臨機防除剤（ピリダリル水和剤フロアブル、アバメクチン乳剤、ニテンピラム水溶剤）を散布する。 3. 臨機防除剤を散布した場合、散布 5 日後に効果の高い薬剤を散布する。
ネギハモグリ バエ 定植時	<p>薬剤防除</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 作条施用

(ウ) クリーン農業技術（病害虫防除関係分）（ねぎ（簡易軟白））

○ネギアザミウマ対策

- ・たまねぎほ場に近接したほ場での栽培回避
- ・ネギアザミウマの被害許容水準の活用
- ・適切な薬剤の選択

○物理的防除

- ・土壌還元消毒法による根腐萎凋病防除

○耕種的防除

- ・アザミウマのハウス内への侵入抑制対策として、ハウス周りの除草、シルバーマルチの設置
- ・タマネギバエ対策として、被害葉のほ場外搬出

- ・タネバエの発生対策として、未熟な有機物施用の回避

※栽培に当たっての留意事項

- 前年にさび病、べと病が多発したほ場では、特に注意すること。

※注釈

●土壌還元消毒法による根腐萎凋病防除

- ・方 法

- ① 有機物(40%C)としてフスマあるいは米糠 1t/10a を作土層混和
- ② チュ-ブかん水：100～150mm
- ③ 透明フィルムで表面を密着被覆
- ④ ハウス密閉 20 日間

- ・殺菌に必要な土壌条件

- ① 地温 30°C以上
- ② ほ場容水量以上の水分
- ③ 処理数日後からドブ臭が発生すること。(酸化還元電位-100mv 以下)

- ・ねぎ栽培における施肥対策

- ① 基肥として 5～10kgN/10a
- ② たい肥など有機物は施用しない。

●ネギアザミウマ対策

・たまねぎほ場に近接したほ場で発生が多いので、そのような場所での作付けを避ける。発生が少ない環境では防除不要の場合もある。

- ・収穫 30 日前までは寄生頭数が株当たり 10 頭以下であれば収量に影響しない。

・収穫前 30 日間の最大寄生時寄生数（上位 3 葉）2 頭が、商品化率 90%に対応した被害許容水準である。薬剤防除によりこれを超えないように抑える。

・薬剤の種類により効果が異なり、また薬剤抵抗性の発達が認められているので、使用する薬剤は最新の情報に基づいて選択する。

(エ) クリーン農業技術（病害虫防除関係分）（ねぎ（土寄せ栽培））

○ネギアザミウマ対策

- ・たまねぎほ場に近接したほ場での栽培回避
- ・ネギアザミウマの被害許容水準の活用
- ・適切な薬剤の選択

○薬剤防除

・病害防除ではべと病と葉枯病の防除に重点をおくため、8月中旬からマンゼブを含む有する剤の予防散布を基本とし、さび病、黒斑病も同時に防除する。

○物理的防除法

- ・根腐萎凋病対策として、土壌還元消毒法の利用

※栽培に当たっての留意事項

○品種によってはさび病が多発するので減農薬には十分注意すること。また、8月下旬から9月以降に発生量が多くなるので注意すること。

○前年にさび病、べと病が多発したほ場では、特に注意すること。

※注釈

●土壌還元消毒法による根腐萎凋病防除

・方 法

① 有機物(40%C)としてフスマあるいは米糠 1t/10a を作土層混和

② チュ-ブかん水：100～150mm

③ 透明フィルムで表面を密着被覆

④ ハウス密閉 20 日間

・殺菌に必要な土壌条件

① 地温 30℃以上

② ほ場容水量以上の水分

③ 処理数日後からドブ臭が発生すること(酸化還元電位-100mv 以下)

・ねぎ栽培における施肥対策

① 基肥として 5～10kgN/10a

② たい肥など有機物は施用しない

●ネギアザミウマ対策

・たまねぎほ場に近接したほ場で発生が多いので、そのような場所での作付けを避ける。発生が少ない環境では防除不要の場合もある。

・収穫 30 日前までは寄生頭数が株当たり 10 頭以下であれば収量に影響しない。

・収穫前 30 日間の最大寄生時寄生数（上位 3 葉）2 頭が、商品化率 90%に対応した被害許容水準である。薬剤防除によりこれを超えないように抑える。

・薬剤の種類により効果が異なり、また薬剤抵抗性の発達が認められているので、使用する薬剤は最新の情報に基づいて選択する。